

# 第10回「日本語大賞」

テーマ「忘れられない言葉」

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「糧」

東京都  
安田学園高等学校  
1年 佐原 昌連

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

安田学園高等学校 一年  
佐原 昌連（さはら・まさつら）

「自分に降りかかるマイナスをプラスにすることができるかは、自分次第である。」  
この言葉を祖父からかけられたのは、私が中学一年生の頃だった。この言葉は、「捉え方、見方、努力次第でどんなマイナスな出来事も自分の成長の源とし、プラスに変換できる。」という意味があると、その時祖父から説明を受けた。

私は小学五年生の頃から囲碁を趣味として嗜んでいる。囲碁との出会いは、伯父が持ってきてくれた囲碁のテレビゲームがきっかけだった。あつという間にのめり込み、毎日時間を忘れて囲碁の勉強をした。次第に棋力は上達していき、地域の囲碁教室では、私に勝てる者がいなくなる程までになった。そしていつしか私は囲碁のプロ棋士になりたいと思うようになっていた。そんな時にかけられた言葉が、先程の祖父の教えであった。その時の私は、囲碁に夢中でほとんど負け知らずであったため、「自分に降りかかるマイナス」の意味が理解できなかった。なぜなら、その時の私の耳には、周囲からの称賛や期待の声ばかりが入っていたからだ。そして私は、本格的に囲碁のプロ棋士を目指すため、プロ養成機関である院生になった。

院生は、毎週土日に対局があり、月毎に序列が発表される。一勝が序列を大きく動かす世界。それはさながら憧れていたプロの世界だった。今までライバルのような存在がいなかった私にとって、院生は自分と同等、またはそれ以上の実力を持った人達ばかりであった。新鮮な反面、とてつもないプレッシャーを感じていた。今まで何気なく打っていた一手一手に、いつの間にか深く重い何かを感じるようになっていた。そしてある日から、私はとたんに勝てなくなった。そんな時に思い出したのが、あの祖父の言葉だった。

それからの私は、マイナスをプラスに変える努力を惜しまなかった。自分のダメなところを徹底的に分析し、改善することができた。今まで我流でやってきたことを見直すうちに新たな発見をいくつもすることができた。その一つが、これまで感覚で打っていたため、ほとんど考えるということをしてこなかったという点だ。その癖を改善するために、碁笥の上にハンカチをかぶせてみたり、必ず手を膝に戻してから打つという独自のルールを作ったりした。このような試行錯誤を繰り返すうち、次第に勝率は上がり、全勝する日も珍しくなくなった。

こうして、不安の中にも喜びを見出せるようになったのだが、六十人程いる院生の中からプロになれる者は年間たったの数名しかない。

中学二年生になった時のことである。上位の壁は厚く、このままプロを目指すべきか、早く見切りをつけて高校受験の勉強に切替えるべきか悩む日々が続いた。食事が喉を通らないこともあった。小学校高学年からその時まで家での勉強は囲碁だけであった。このままではどちらも中途半端で終わってしまう可能性があった。そして私は院生を辞退することを決断した。二年生の夏休み、受験生としてぎりぎりのところであった。

こうした不安でいっぱいの中、私はまた祖父のあの言葉を思い出していた。囲碁のプロを目指し、それに専念した三年間を「悔い」として捉えるか、逆に「囲碁を一生の友とし、貴重な経験ができた」と捉えるかは自分次第だということだ。私は祖父の教えから、囲碁で培

った経験はこれからの人生できっと何かの役に立つ時がくるだろうと思うことにしたのである。そう思うことで何かが吹っ切れ、その後の受験勉強に集中して取り組むことができた。

これからも私の人生で、マイナスのことが押し寄せてくるだろう。そんな時、また私は祖父の言葉を糧に生きていきたい。院生の頃のように必死で、囲碁で養った先を読む力や大局観を大切にし、状況を冷静に捉え、マイナスのうねりの中にある小さなプラスを探し、見方を転換していきたい。